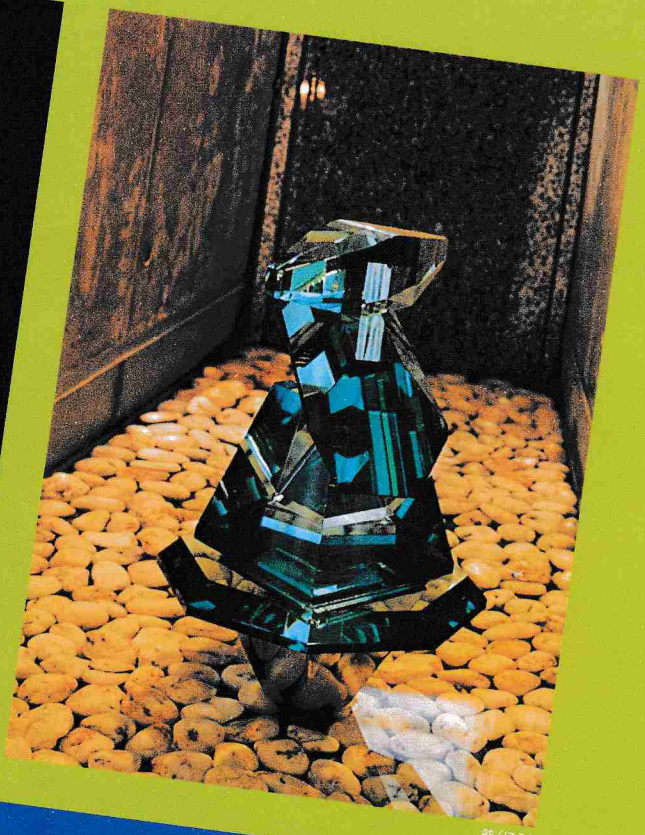
NO.28 1999.4

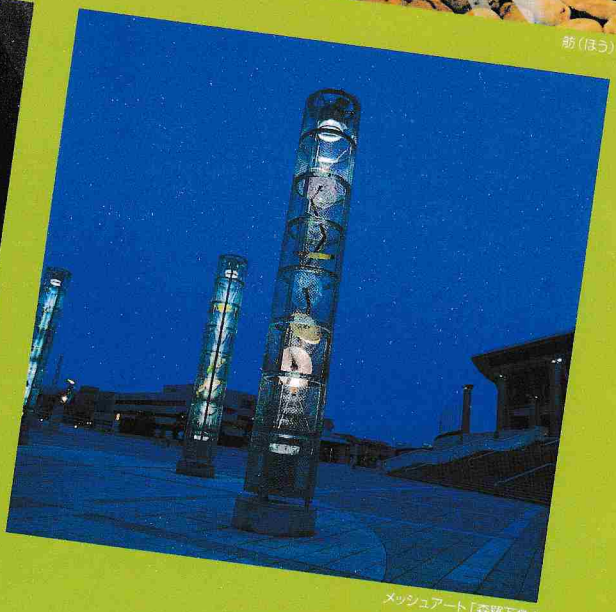
aaca

聖三位一体



舟（ほう）

翔馬



メッシュアート「森羅万象」

社団法人 日本建築美術工芸協会

ガラス造形家
YURIYO WATANABE
渡辺　百合世
東京品川区荏原2-3-10-401
TEL03-3785-7072

「聖三位一体」
設置場所：豊島区千早町修道院礼拝堂
聖母奉献修道会
2000㎜H×600㎜W×2φ1000㎜D

永遠と神聖のシンボルである円と地上の秩序を現わす正方形を聖三位と四福音書記者の7個を配置、宇宙的広がりを求め、丸窓は神の大きな慈愛に包まれた平和を現わす。天上と地上を関連、一体化するように創作した。

YOSHIKO TAKIKAWA
瀧川　嘉子
東京都大田区南千束2-20-5
TEL03-3726-3702

「舫（ほう）1998」
設置場所：中野区／宝生教東京本部教会
365㎜H×324㎜W×575㎜D

奥の嵌め殺し窓から陽光が差し込み、窓下から水が流れる、「せせらぎ」という名の細長い空間。コンクリートの壁に挟まれ奥へと更に狭まる空間は、さながら光と聖水を求めて彷徨う旅の道程。水と光、命の根源へと漂う「舫」。

壁面アートデザイナー
BEA HAMAZAKI
浜崎　ベア
東京都中央区日本橋浜町2-17-6 ハマヤビル2F
TEL03-3661-0186

「翔馬」
設置場所：
1000㎜H×1000㎜W

東レエクセーヌは、さまざまなライフシーンを彩っておりますが、その高品質なマテリアルを生かし、新たな技法で考案したブリスアートは、ボリューム感と質感がすばらしく、視覚に大きく訴える、格調高いインテリアです。

環境・造形デザイナー
MAKOTO YAMAMOTO
山本　誠
東京都練馬区旭丘1-66-5-1402
TEL03-5983-8275

メッシュアート「森羅万象」
設置場所：新横浜／横浜国際競技場
8000㎜H×φ1000㎜

2002年ワールドカップのメイン会場となる7万人収容の国際競技場のゲート前広場に8基のシンボル照明が来場者を迎えます。ジャンルの異なるアーティストによるメッシュアートが噴水、音、光と一体となって、世界の人々を歓迎するでしょう。

CONTENTS

'98飛騨高山aaca景観シンポジウム…1
aacaトーク ……5
時代の華一輪 ……7
第8回aaca賞審査講評 ……8

■表紙デザイン
高部　多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合せ下さい。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
広報担当理事　柳澤孝彦
委　員　長　玉見　満
副 委 員 長　高部多恵子
冨田俊男、北村孝昭、石田眞人
渡部毅志、高塚信吾、山埼輝子
制作協力：㈱SP建材エージェンシー

'98 飛騨高山aaca景観シンポジウム――「まつりと景観」

日時：平成10年10月29日(木)
　　午後1時15分～5時
場所：高山市民文化会館

パネルディスカッション
司　　会：内井　昭蔵
パネラー　浅井　愼平
　　上山　良子
　　村井　康彦
　　渡辺　文雄

あいさつ

aaca会長
芦原　義信

なかなか面白いシンポジウムです

当協会は建築家や美術家や工芸家が一堂に会しまして、日本の街並み、景観を少しでもよくしようという文化庁公認の社団法人です。本日はご多忙の中、林田文化庁長官がお見えくださいまして、これから基調講演をしてくださいます。そのあとプログラムにありますようにパネラーの方がたとのパネルディスカッションを内井昭蔵副会長の司会で進めさせていただきます。

このシンポジウムは、もう十年やっていますが、なかなか面白いシンポジウムです。どうか皆様時間の許す限りご静聴をよろしくお願いしたいと思います。

岐阜県知事
(副知事代読)
桑田　宜典氏

人と人とのふれあいの場

本日のシンポジウムは「まつりと景観」をテーマとしています。伝統的なまつりから新しいまつりまで、そこには自然への畏怖と感謝、人と人との触れ合いの場が設けられています。そのような人間の営みと景観というもののかかわり合いをテーマとした本シンポジウムは誠に当地にふさわしいものと思います。これから行われますシンポジウムの中ではさまざまな分野において第一線で活躍しておられますパネラーの方がたから多くの示唆に富んだお話がお聞きできるものと期待しています。

高山市長
土野　守氏

変貌の時迎え意見を拝聴

今後、高山市におきましても中部縦貫自動車道をはじめといたしまして、そのほか高山駅周辺整備事業など都市景観が大きく変貌（ぼう）しようとしています。

このようなときに都市景観や地域文化についての各分野での著名な先生方がお集まりになり、今回のシンポジウムを開催していただく。そのいろいろな意見を拝聴できることは、これからの高山市の景観づくりにとりましても大変重要なことではないかと考えております。大いに参考とさせていただきたいと思っているところです。

基調講演

文化庁長官
林田　英樹氏

重点主義、厳選主義からの転換を
―新しい文化財行政をめざす―

文化庁が景観への取り組みを始めたのは必ずしも古いことではありません。その根幹的な仕事のスタートは古社寺保存法で、昨年、百年を迎えました。戦後の文化財保護法もまもなく50周年を迎えますが、法律ができた当時の日本の状況からしますと、財政的に大変大きな重い仕事ということで、指定は重点主義、厳選主義でやってきました。

しかし、戦後に比べれば経済的にも余裕ができてきましたし、また、近年、文化財に対する関心が大変高まってきていると思います。そういう中で、重点主義、厳選主義をそのまま続けていく時代ではないだろうということが共通の理解になってきました。

それで、ちょうど平成4、5年ごろだと思いますが、私が文化財保護部長のときに、文化財保護制度全般を時代に即して見直そうと文化財保護審議会の中に委員会を設けて検討してもらいました。その報告が平成6年7月にまとまっています。その報告に沿って文化庁はどのような仕事をしているかを報告したいと思います。

一つは、重点主義、厳選主義から保護措置、保護対象を拡大していく。もう一つは、社会状況の中で消えていく生活文化と言われるものや民俗技術についても、新しい視点で捉え、文化財として保存を考えていくべきではないかという点です。

三点目は、近代の文化財産をもっと保護していこうという方向。時代が新しいということと同時に日本の近代化を支えてきた産業関係の遺跡をもう少し指定していこうと、たとえばダムや発電所、炭坑などを指定する動きになっています。原爆ドームもこの方針により文化財保護法の史跡に指定し、世界遺産への登録も実現しました。

もう一つは、いろいろな文化財を総合的に守っていこうということです。たとえば、建造物、美術工芸品、史跡を総合的にとらえなければならなくなってきているのではないかという方向です。また、天然記念物などの動植物の場合、動植物だけを守るのはなかなか難しく、動植物が生殖する環境を守っていかなければならない。こういう考え方を取り入れようということも新しい方向です。

それから、環境に関する文化財保護をもっと進めなければならないということです。建物や史跡、名勝などの周辺で何か影響を及ぼす行為があった場合、それを制限できる根拠の規定はありますが、相当な財産的な制限を課すことにもなりますし、どんな基準でどこまで制限するのかというコンセンサスも十分ではありません。しかし、一方で、各地方で、都市計画や自然保護、地域づくりという観点からいろいろな努力も始まっていますので、こうした動きや各省庁との連携を図って、文化財の保護を効率的、効果的に行っていく必要性も打ち出されています。

次のポイントは、保護手法の多様化です。弾力的手法で保護していこうという

もので、その一番典型的な例が、すでに始めている文化財の登録制度です。もう一つは、ナショナルトラストを始めとする民間活動との連携、協力。また、文化財を核として街づくりや村おこしを進めていかなければならないという課題がある中で、文化財が集中している地域については、もう少し面的な保護をしていく必要もあります。伝統的建造物群の制度は、その先駆けになるものですが、これは地方の自主性を尊重した制度づくりが取り入れられ、景観、まち並みの保存のために大きな役割を果たしていると思います。高山市の伝統的建造物群の保存地区は、日本全国の伝統的建造物群の中でも代表的な保存地区になっていると思います。この高山の活動が日本のモデルになる形で進めていただければありがたいと思っています。

それから、自治省や建設省との連携も最近始めました。

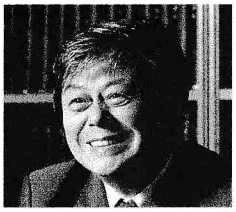
また、文化財関連産業をもう少し視野に入れた仕事をしていかなければならないのではないかという指摘が強調されています。産業振興のための予算はとれません。しかし、ストレートには難しくても、関連する省庁との連携でそういう方向性を出していきたいと考えています。

さらに、地方公共団体の役割が重要になって来るということも強調されています。ご承知のとおり行政改革の動きの中で権限を国から地方へということが相当強く求められてきました。しかし、文化庁が直接目を光らせていないと地方では文化財保護よりも開発の方に押されて文化財保護がおろそかになるのではないかという専門家の方がたの指摘も強いものがあります。とはいいましても、文化庁だけが自分で何かをするという時代ではなくなってくるであろうということだけはあります。

もう一つの大きな流れは、いわゆる世界遺産です。世界遺産制度の場合、大きな特徴は、その文化財だけではなく、その周辺をバッファゾーンとして守ることが条件づけられていることがあります。ところが、このバッファゾーンという考え方には、ヨーロッパ諸国とわが国とではまだ差があるような気がします、公的であろうと私的であろうと立派な文化財があればその周辺はそれにふさわしい環境として守っていくことが当然という雰囲気がヨーロッパ諸国にはあるのではないかと思います。とは言いましても、日本の世界遺産の登録はかなり成功している方だと思います。指定されることによってその重要性の認識が高まり、かつ守っていこうという動きもかなり高まってきたのではないか。また、自分のところもぜひ入れてほしいという要望もあります。ですから、今後もこういう制度を契機にして景観を守っていくことの重要性が広がっていくことに努力していきたいと思っています。

経済状況が厳しいわけですが、日本が文化を大事にする国になるんだ、そのことが国民の求めていることなんだという声が、もっと大きく上がるようにしていく努力をしていきたいと考えている次第です。

パネルディスカッション



建築家／aaca副会長
内井　昭蔵 氏

神なき時代のまつりはいかにあるべきか

最近では、まつりがある意味では盛んに行われていると思います。しかし、それは私たちがかつて体験したまつりとはかなり変わってきた。変容してきたと思います。その背景の一つに、まつりを成立させていた地域社会あるいは「家」というものが崩壊したからではないでしょうか。

1956年から72年くらいまでの高度経済成長の時代、都市化が急速に進展して農村人口を吸収し、地方の過疎化が進みました。そして地方は高齢化のためにまつりの担い手が減少してきました。一方、大都市は、大量消費の場であり、情報化の波が消費傾向を一層増進させ、大衆消費社会の波におおわれました。日常生活の中では常に消費が繰り返される。正月行事や盆行事、結婚式なども商品化されてしまっています。クリスマスやバレンタインデーなどは商品の年中行事といってもいいと思います。さらに、まつりを支えていた要素、機能であるコミュニティも消滅しました。つまり、都市化はまつりの世俗化をもたらしたと言ってもいいと思います。

私たちの生活の中でハレとケ、まつりと日常との対立が溶解してしまった。高度成長期、国民所得と生活水準の向上の結果、かつてハレだったものが普段でも経験できるようになってしまった。毎日がハレの中のハレ。しかも、それは商業化されたハレである。

ハレの空間という問題に焦点を当ててみると、都市は、かつてまつりのときにしか接することができなかった多種多様なハレの空間が増えています。都市の原点でもある盛り場では、欲望の刺激、開放装置が用意されて視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、あらゆる感覚が動員されて強い刺激と開放感に満ちています。しかも、情報化社会への移行が都市の盛り場領域を拡大した。また、都市におけるまつりは○○博覧会、□□の祭典などのかたちで、一過性の巨大な、イベント化してきました。

景観の問題もあります。かつては、家の内外に多くの神様がいたと思います。いろいろな場所場所に神様が存在していた。そして、まつりはそれを中心におこなわれてきました。しかし、都市化の波の中でそういったものも消えてきた。どちらが先かという問題はありますが、日本の美しい伝統的な景観が、まつりとともに消えつつあります。その背景にあるのは、家とコミュニティの構造が変わってきたことにあるのではないでしょうか。

こうした現在にあって、商品化されたハレはどこまで人の心の奥底にある穢（けが）れを拭いさることができるかどうか、なおせるかどうか、人の心をいやせるかどうか、そして精神を高揚させることができるのかどうか。ここにカギの一つがあるのではないかと思います。また、神なき時代のまつりはいかにあるべきかも問題にすべきテーマだと思っています。神がそこに招かれなくても地域がまとまり、帰属意識を創出したり、発展させたりするための運動が成立し得るか、地域社会のアイデンティティが醸成され、それが神になり得るかどうかを考えていかなければならないのではないでしょうか。

写真家／小説家
浅井　慎平 氏

宇宙観のなさが景観もまつりも変えた

いま、神を知らない人が増えたのではないか。つまり、神がいない。神という言葉を使いましたが、宇宙観をもっていないのではないか。これは、そういう景観なり生活様式なり文化をもっていないということなのではないでしょうか。きょうテーマになっている景観とかまつりという話しをする後ろ側では、宇宙観のなさが景観もまつりも変えてしまったのではないかという感じをもっています。

人間の手の届かない宇宙の約束といいますか、拘束のようなものがせっかくあるとするならば、われわれは、謙虚に畏敬（いけい）の念をもって宇宙と接しなければいけない。

その宇宙に接する気持ちが、多分、普段というものをつくってくれるという考え方につながっていく。人生観といいますか、世界観につながっていくのではないか。だから、もう一度普段をとりもどせば、きっと素晴らしいまつりがまっているに違いないという感じがします。

ハレの連続を断ち切るといいますか、普段を取り戻すための生き方を選択しないと、エネルギーが毎日のように拡散されていくことになる。やはり、エネルギーを溜めるためには、普段というものがあって、まつりのときには、という思いをどこかに秘めていないとだめだろうと思います。

（会場との意見交換の中で）一つ分かっていることは、日本には様式の混乱があるということです。時代のつくった様式というものがあり、その背後にはさまざまな文明、文化があるのですが、建物と次の建物とのあいだにまるで脈絡がない、風景が非常に混乱しているということが起きています。シカゴにしろニューヨークにしろ、ある種の混乱が起きている部分はあるにしろ、一応、ある時代がつくった様式や都市のテイストが残されています。

ですから、日本の風景を撮るときには、極端な言い方をすると自分の概念や意識を捨てないとシャッターを押せないというつらさがあります。現実をレポートするのであれば、そのまま撮っていくしかないのです。

ランドスケープ・アーキテクト／
長岡造形大教授
上山　良子 氏

風土建築のガイドラインつくるべき

景観を考えるときには、土地の資源を読みとり、記憶を伝承していくことが非常に重用な要素の一つであると考えていますが、地元の方がたは、土地の資源をみていて、それも、ものすごくいいものを毎日みているときに、それが当たり前だと思い過ぎているところがあると思います。たとえば山があって、山のすそ野と田んぼがぴしっと切れているようなところがあります。私どもから見ると、それはすばらしくきれいです。しかも、そこには植物も動物もたくさんいる。そういう里山の典型的な田園と山との接点をみて、どこにでもあると見る人と、しっかり守っていこうという人がいる。ここにポイントの一つがあると思います。

もう一つは教育の問題。教育という言葉はよくないかもしれませんが、一人ひとりが資源であるということであり、ワークショップが大事になってくる。ワークショップの際、専門家と普通の人びとの意識を一緒にするために、誰かがファシリケーターになって、何がいいかを事前につくってしまう。ただし、見せないでおく。専門家と一般の方がたとの間に入りながら、後ろにもっている理想に近づけていくのです。そういうやり方が今までやってみて最も良かったようです。そういうものがないと、バラバラになってしまい、大切なものが見えなくなってしまいます。

それと、風景をつくるという意味からいうと、風土建築をつくっていかなければならないと思います。そのためには、ここではこういう素材以外は使ってはいけませんよというガイドラインはつくるべきであり、それは建築家に頑張っていただかないといけない。

もう一つ、国際性というのは、非常に土地的なものだと思います。そういう土地の資源をみつけなければならない。それを見つけるのは土地の方がただと思います。資源はぎっしり詰まっているのに、みつからないから、すぐに風が抜けるということになってきているのではないでしょうか。

京都市歴史資料館館長
滋賀県立大教授
村井　康彦 氏

神々は遠ざかり木に竹をつなぐ近代

戦後間もなく勉強し始めた世代は、江戸時代につくられた村八分なんかをする村の共同体的関係は封建的であって、イコール悪であり、これを撲滅することが民主主義をつくり出すのに大事なんだという認識がありました。つまり農村的なものは悪であると。実際には、高度経済成長期に入って、農村から若者が都会へ吸い寄せられ、村には働き手がいなくなって、まつりを支える基盤が失われていたわけです。

それで都会へ出ていった若者を引き戻そうとしたがそれもほとんどの過疎地では成功しなかったといっていいと思います。それに代わって、交流人口の増加ということになり、田舎でもイベントが次々に組まれてきました。

しかし、農業生産にもとづいていたまつりは毎年繰り返し行われる必然性があった。ところが、今日行われているイベントは、毎年安定的に行われていくという条件がほとんどないと思います。それをいかに恒常的な、安定的なものにできるか。それができたときにイベントがまつりになったという言い方もできるのかもしれません。

また、まつりは祭事であり、その祭事というのはいわゆる祭祀であると同時に政治でもあったわけです。しかし、今日では、そういうことは憲法違反ということで排除されてきている。たとえば、文化財行政を考えても、寺や神社を修理する際には信仰や宗教性を取り除いて、あるいは脇において、これは文化財であるという格好で扱う。そのようにして神々が遠ざかったり、あるいはなくなってきたという感じがします。

（会場との意見交換の中で）近代以前は、おそらくほとんど差のない、標準化

された建物、農村があったと思いますし、それなりに街の性格規制のようなものもあったと思います。

しかし、それは、建物はこういうふうに建てなさいということではなく、たまたまそれ以外の標準仕様がなかったと考えた方がいいのではないでしょうか。それが、近代になってさまざまな建築素材が出てきて、そこに木に竹を継ぐという状況になった。

俳優／エッセイスト
渡辺　文雄 氏

まつりが似合う佇まい、景観にしたい

私は東京の下町の生まれなのですが、残念ながら、今やおまつりはないというのが東京です。確かにたくさん人が住んでやっていますが、御輿（みこし）の担ぎ手がいなくて、埼玉県や千葉県、神奈川県などから担ぎ手を集めているわけです。

ですから、東京をもう一回本物のおまつりが行われる街にしたい。そういう佇まい、景観をもった街にしたい。

しかし、今のままの都市計画では、間違いなく東京あるいは都会のおまつりは皆無になると思っているところです。

また、街という入れ物に熱気や気がこもりにくくなりました。変に風通しがよくなって、そういうものが全部隙間から漏れてくる。そういう街になっています。

街だけではなくて、村も、昔のように中の熱気がぐっとこもるという構造ではなくなった。そういう感じがして仕方ありません。

そのせいかどうかわかりませんが、食と住が分離していて、街というのは間違いなくお金を稼ぎに来る場所になっているような気がします。最近の盛り場は通いの盛り場です。だから、どうしてもその日の現金収入のためにハレをやっているという気がしてしようがない。

それを「目の前現金主義」と悪口を言っているのですが、本当のハレの世界には「目の前現金主義」くらい似合わないものはないと思います。

おまつりも間違いなく生えてくるものだと思います。今は、置いてあるのが多くなってきた。生えてきていない、根付いていない。根付くということはちゃんと芽が出て成長して、根も伸びるということです。今は、置いてあるものと生えているものの差が見えなくなっているところがあるのではないでしょうか。

（会場との意見交換の中で）景観を考え、つくっていく際、最もベースになるのは、所有感覚だと思います。これは自分の高山だとか、私の乗鞍だとか。そう思うとエネルギーが湧くんです。そして、連帯観をつくる。日本人はそういう所有感覚を持つのが下手ですが、ぜひもっていただきたいと思います。

'98 飛騨高山aaca景観シンポジウムを共催して

高山市役所建設部都市計画課
建築係長
SUSUMU OZAKI
尾　崎　　進
高山市花岡町2-18
TEL0577-32-3333

秋の高山祭りも終わった10月29日、「まつりと景観」をテーマとした「第10回'98飛騨高山aaca景観シンポジウム」が社団法人日本建築美術工芸協会の皆様のご尽力により、小京都飛騨高山で450名の大勢の方々の参加をいただき、盛大に開催されましたことについて、厚くお礼申し上げます。

昨年5月、来年はaacaシンポジウムを高山で開催する事になったから仙台へ行ってこいと言うことでした。岐阜県と共催で開催すると言うことで、岐阜県土木部建築課の方と仙台へ行くことになりました。

仙台は、「杜と景観」をテーマに580名の参加者を集めた盛大なシンポジウムでした。事務局である仙台市役所の担当の方のお話しを聞き、今まで開催された大都市と違い6万7千人の小都市の高山で本当に開催出来るのか不安を抱きながら帰って来ました。

技術系である私にとって何もかもが初めてで、何から始めたら良いのか迷っていましたが、伊藤事務局長さんや県の建築課の名村係長さんに、相談させて頂き何とか開催の目途がたってきました。

さて、開催当日一番心配していた参加者も、ほぼ満席になり胸をなでおろしました。これはすばらしいパネラーの先生方にお集まりいただいたおかげと感謝しております。

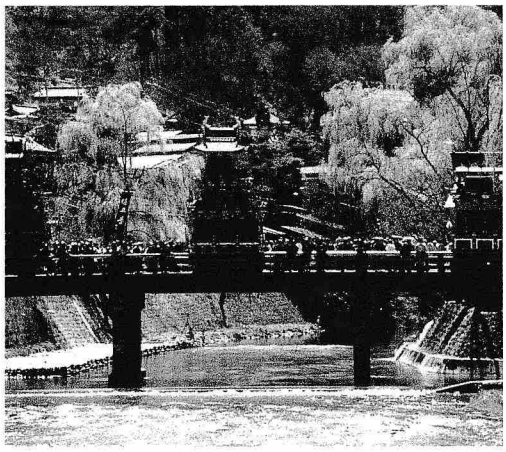
高山市では、古い町並みが住民先行の形で保全事業が進められていましたが、官民共同して推進することで、高山市市街地景観保存条例を定め地区指定をしてきました。その一部が文部省により、三町伝統的建造物群保存地区に指定され、「市民意識の高揚」と「制度」が相まって古い町並みの保全が順調に行われています。

しかし一方では市街化が進み、必ずしも良い景観とはなっていません。昨年、市内の用途指定の無い新宮町で、住民自らが「自分たちのまちは自分たちの手で」ということで自主規制を定められました。

市民のこのような景観、まちづくりに対する意識の高まっている時に、今回のシンポジウムで各パネラーの先生方の貴重なお話しや意見を拝聴することができ本当に有意義なシンポジウムであったと思います。

このシンポジウムに際し、昨年開催された仙台市、aacaの方々、岐阜県、又各種建築関係の皆さんに大変お世話になり感謝しております。

最後に、日本建築美術工芸協会の益々の発展と今後のシンポジウムの成功を祈念いたします。



「まつりと景観」高山フォーラムに参加して

aaca会員
クロタニコーポレーション
NOBORU OKAZAKI
岡崎　格
東京都千代田区内神田1-15-15
TEL03-3292-0511

紅葉には、いま少しの10月29日「aaca」第10回フォーラムが飛騨高山で開催された。午後1時30分、会場の高山市民文化会館ホールは満席の盛況で、会長芦原先生には文化勲章受章のまことにお目出度い時のフォーラムとなり、岐阜県知事（代理）、高山市長、文化庁長官各位からのご祝辞もあり「aaca」としても、たいへん名誉ある会合となった。テーマの「まつりと景観」は開催地高山に極めてふさわしいものであり、中味の濃い文化の香り高い内容となった。当会の内井コーディネーターから、まつりの位置づけと歴史上の変化が興味深く述べられた。つづいてパネリスト各位から豊富な知識と情感あふれる意見発表があり参加者の興味を呼んだ。当会の上山良子先生、村井康彦先生に写真家浅井慎平氏、エッセイスト渡辺文雄氏の豪華な顔ぶれで、レベルの高いディスカッションは参加者に共感を与えたものと思う。

休憩のあと参加者からの質問に応える形で再開され開催地高山から、するどい観点からの問い掛けがあり、さらにフォーラムの内容が深まり、高い評価を得たものと思う。

翌30日は快晴に恵まれ、さわやかな飛騨路の散策にて、歴史的な陣屋跡をはじめ興味深い建造物や町並みに有意義な時間をもつ事ができた。

地元の有力オーナー会社（飛騨庭石、中田金太社長）が最近建設した「祭りの森、ジオドーム」は投下資金100億円とも言われ、高山の荘厳な屋台をそのままに再現、展示してあり豪華絢爛「匠の技」が今日に受け継がれている証明でもあった。縁あって、当社がジオドーム中心に

製作した金銀銅の積み上げピラミッドも（重量、金1トン銀8トン銅12トン）設置してありaacaのみなさんに観ていただいた。

記念すべき10回目のaacaフォーラムはテーマにぴったりの高山で2日間に亘る研修は、参加者の心に残る錦秋の一時を味わうことができたことと思います。心からの感謝とお礼を申し上げ結びといたします。

aacaトーク

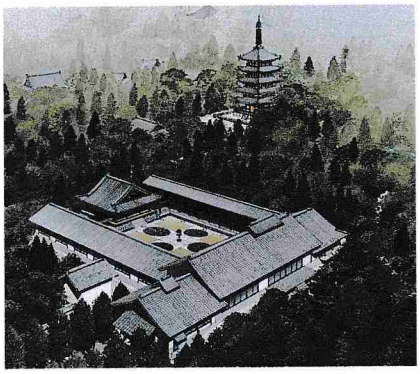
aaca会員　建築家
㈲杉山隆建築設計事務所
TAKASHI IMASATO
今里　隆
東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビル5階
TEL03-3580-3021

最近の日本の街並みを見ると、様々な形や色をした建物が現われ、まるでおもちゃ箱をひっくり返したように思われる。建物に自由なファサードを与え変わった建築物をつくる風潮が、ポストモダニズムの流行と共に現れ、設計者の主張ばかりが目立つデザイン過剰な建築がもてはやされるようになった。表面のデザインに凝り、その中に入る人間を無視した「人間不在の建築」は、現時的流行が過ぎると次の建物にとって変わられる。このような繰り返しの建設行為が、建物を消費物にしてしまい、巨大な消費物の並ぶ退屈な街並みを形成することになった。建築は文化であり、商品ではない。気候、風土、歴史、人間、様々な要素の上に構築されるべきものである。日本という風土の中で長い時間をかけて熟成された日本建築を再認識し、次世代に残せる文化としての建物、「日本独自のもの」をつくっていかなければならいないと考える。この様な観点から日本の文化の特質について以下述べることとする。

日本文化の最大の特徴は外国の文化を積極的に取り入れ、同化してきたことにある。中国から伝わった漢字から「仮名」を発明し、仏教伝来と共に日本に入ってきた唐時代の建築様式を、雨の多い日本の気候に適合させ軒先を多く出すことにより日本独自の建築美を作り出した。歴史や風土、民族性に合うものを取捨選択していきながら日本独特のものに純化させていく作用をもっているといえよう。非常に多様性がありながら、それがひとつに日本的という意味で統一されている珍しい文化である。

第二の特徴として、矛盾に満ちた調和というべきものがある。ある音楽家が対談の中で述べていたが、洋楽と邦楽の違いは音と音との「間」の取り方にあるという。正確にリズムが決められた洋楽と違い、邦楽は歌い手や演奏する者がリズムを自由に刻むことができる部分があり、個々に任せられた「間」のとり方により洋楽上では考えられない組み合わせで並んでいる音をも、心地好く聞かせる。音楽での「間」は、絵画や書道における「余白」であり、建築においては、縁側、回廊の存在となる。「間」、「空間」により矛盾しているものを繋ぎ止め、全体として連続性のある形に完成させるのである。

第三に自然との繋がりの深さがある。豊かな自然と四季の変化が、日本人の細やな感性を発達させ、茶道、華道、文学、美術を生む。京都御所の紫宸殿は、前庭に敷かれた白砂に太陽光が反射し、建物の奥まで光が届くようにつくられている。



京都醍醐寺伝法学院施工中

京都醍醐寺霊宝館施工中

この光の取り入れ方は建築における自然と密接な感性の現われの一例といえる。

生活様式が大きく変化した現代において、「和」でなければいけないと主張しているのではない。優れた日本文化を再認識した上で、文化としての建築を考えていく必要があると考える。木造の日本建築、社寺、書院、数寄屋、町屋、民家等は、夫々日本の風景にぴたりとはまり込んでいる。また最近建材によるシックの回避という観点から木造は見直されつつあるが、風土に適した機能性という点では他の材より優れている。技術者の不足、防災上の問題等から都心部で木造建築を残すことは難しいことであるが、日本の文化を後世に繋いでいくために平成の木造日本建築の傑作を残すことができればと思っている。それが吉田五十八に師事し、日本建築の素晴らしさを学び、50数年間建築の世界に携わってきた私の使命であると考える。

aaca会員／建築家
㈱日本設計社長
TETSUO NAITO
内藤 徹男
東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル42階
TEL03-3344-2311

ヴォーリズを継いで
関西学院大学上が原キャンパス再整備

関西学院大学は110年前にアメリカ南部のメソジスト教会によって神戸に設立された。昭和4年に現在の西宮に移ってすでに70年、W. M. ヴォーリズによって設計されたスパニッシュ・ミッションスタイルの校舎群は今も現役で、清冽なシンメントリー配置の、深い緑陰の優美なキャンパスは全国でも屈指のものだ。

私の住まいはすぐ近くにあって、キャンパスは庭つづきといった感じ。だから、学生数が増えた30年、40年代に続々と箱のような校舎が建ったとき、こんな美しいところにナンデヤ！というのが若い頃からの素朴な疑問。20数年前に、縁あってキャンパスの再整備に参画させて頂いたとき、今では学院の大切な資産となっているスパニッシュ・ミッションスタイルを駆使し、同時に、オリジナルのキャンパス配置の骨格を生かしながら整備しようと決意して、今日まで営々とやってきた。

とは言っても、同じスタイルを20年も続けるには忍耐がいる。時にはガラス張りにしようか、アトリウムを造ろうかと迷ったが、そんな人工的なものより、ここには本物の日当たりと緑と風があるではないかと、懸命に浮気の虫を封じてきた。

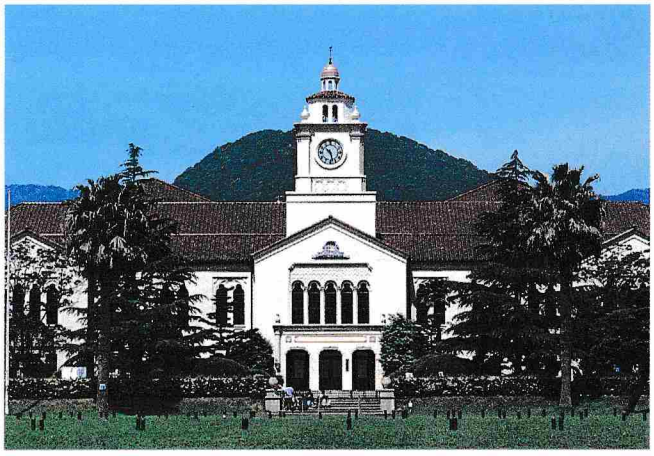
スパニッシュは大正から昭和にかけて流行ったカリフォルニア渡来の建築様式だ。ここ阪神間は六甲山を背にした、温暖で雨の少ない、土も白くてカリフォルニアの明るさに似た土地柄。その頃は大阪の富商たちが住職分離で阪神間に移り住み、モダニズムをとり入れた生活文化を享受した時代で、スパニッシュの邸宅が盛んに建てられた。そこにヴォーリズ氏の活躍があったわけで、関西学院もその時代の波の産物といえる。

スパニッシュ・ミッションスタイルの後ろ半分、ミッションスタイルは19世紀後半にカリフォルニアで興った歴史風土的建築様式で、我国ではほとんど知られていない。18世紀の北米西海岸は未だバッファローと原住民の楽園であったが、フランシスコ修道会が宣教活助を敢行して、18世紀後半からほぼ100年間で、サンディエゴからサンフランシスコの北方ソノマまでのあいだに、21のフランシスカン・ミッション、つまり原住民の教化と生活指導の基地を設立した。

宣教師と原住民の建てた礼拝堂や施設は日下しレンガ積みの粗末なものだが、地震の多い地帯だけに、分厚い壁と無骨なバットレス、小さな開口部が特徴で、それが風土的なカタチになり得ている。20年前に私は一つ一つを巡礼したが、その佇まいと共に、ミッションの悲劇の歴史を知って、激しく心を動かされた、この建築が原形となって編み出された様式が、19世紀のミッションスタイルで、学校や劇場、駅舎などに多用された。

関西学院では、本体を堅固なミッションスタイルにして、玄関廻りにスパニッシュの繊細な装飾を施して、清潔な姿になるように努めてきた。先の阪神大震災ではその効果は顕著で、キャンパスの地境をA級の甲陽活断層が走っているにもかかわらず、70才のオリジナルと弊社の手掛けた建物は無傷で、戦後の箱形校舎はかなりのせん断損傷を受けた。

いま「100年建築」が叫ばれている。建築の技術や性能に100年のライフサイクルを求めているものだが、建築の様式は、それをはるかに綾駕する生命力を宿しているように思える。



旧図書館の背後に新図書館をシンメトリーに造る

スパニッシュ・ミッションスタイルで統一した新校舎

時代の華一輪

aaca会員 運営委員
デザイナー
KIYOSHI NAGAHARA
永原 浄
東京都板橋区成増2-36-36
TEL03-3975-1800

鉛色のとろりとした海面に鯛釣舟が漁をしている穏やかな瀬戸内を新岩国港へ1時間20分の船旅をした。船内は数人の客のみで静かな時間を楽しんだ。高松でタクシー運転手は「最近は仕事が少なく、橋が出来た頃は忙しく良かったですよ」と嘆き気味に話していた。

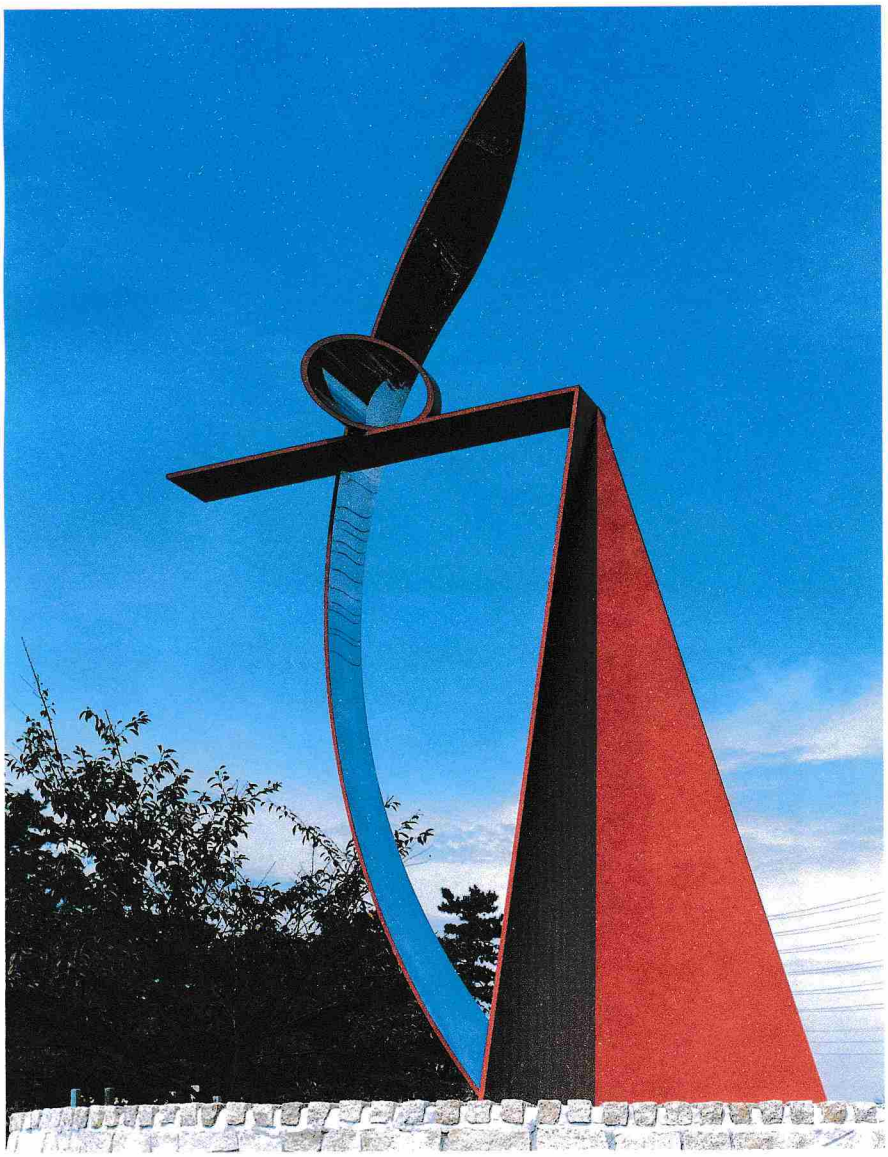
同じ事を松山駅のタクシーからも聞いた。いつか渡った鳴戸大橋もそうなるのだろうか。港に迎えの車が来ていて柳井の町に向かった。

山陽道の古い小さな街を訪ねて見ようとやって来た。日本の古い街路、歴史の街、日本のふるさと地図によくでている街で、特に古い港に興味を持っているので訪ねて見た。そして竹原の町並みも。どの町も一本路だけが対照で、日本映画のセットのようにきれいに出来ていた。街路ではガイドの後を中老年の男女の一団が気懈るそうに歩いていた。軒並みに同じような土産物が並べてあり、幾人が中で買い物をしていた。ヨーロッパの古い街路で見る光景とは違って市井の人の活気に加えて観光の人々が添える空間の風情が物足りなく、風景として感激を受けなかった。

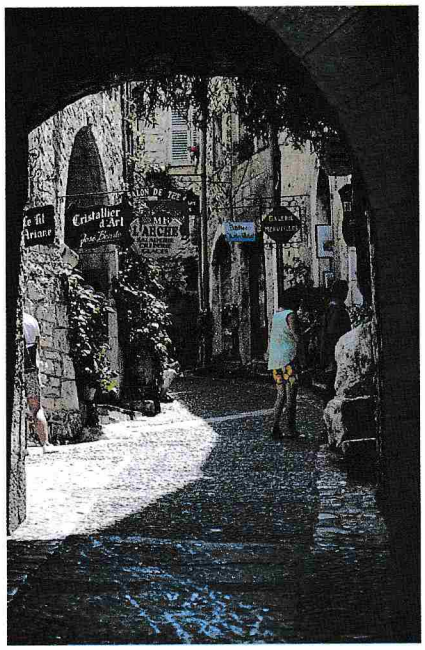
竹原の人の勧めで尾道に降りてみた。狭い巾の街で、小高い山に向かって急斜面に人家が押し迫って建っていた。山頂から見る瀬戸内の小島の重なりの夕暮れが美しい景色にしていた。左に目を移すと新しい大きな橋が懸けられていた。瀬戸内の風情が変わるだろうと感じながら再開発ビルの間を通ってホテルに向かった。出版物の案内の街路をたずねるのはやめにしよう。一本の限定街路だけで全体の景観の見えない街は寂しい。やはり街路には家並みの間から地域の文化を感じる息吹があって欲しい。

1996年6月に有楽町駅前の戦後と変わらない風景の反対側に巨大な建物が建ったので見学に行った。デザインはすでに時代を離れているのを感じ、千億の都税はいつ都民に還元されるのだろうか。ランニングコスト、メンテナンスチャージの事を思ったら気分が悪くなり友人建築家と外に出た。

地球温暖化防止にCo^2の削減が叫ばれ、電力のセイブ、街路灯は宇宙に光をとばさないように光を下向きにと環境ガイドラインが作られている。それとは裏腹に新都のイメージの夜景は光のドームを誇らしげにイラスト化した記事であった。本当に地球に加護されている地球人としてしっかりした文化を考えているのだろうか。生命の営まれている自然を持った人間として21世紀は確かな環境を整え22世紀の子孫に受け渡して行く勤めが文化ではないかと。路傍に咲く一輪の花はしゃぎ立ず、そそとして人の心に潤いを与えてくれる、そんな物造りでありたい。



泉佐野市公園墓地モニュメント「風」



プロバンス、サンポールドバンスの街路

審査委員長（aaca副会長）　内井　昭蔵
審査委員（aaca理事）　曽田　雄亮
（aaca理事）　榮久庵憲司
（aaca理事）　近江　　栄
（aaca理事）　澄川　喜一
ゲスト審査員（aaca会員）　村井　　修

審査経過報告書

審査委員長：内井　昭蔵

第8回AACA賞は例年よりも1ケ月早く応募をしめ切った。これは毎年現地審査の時間が充分にとれずスケジュールをこなすことが困難であったからである。

今回の応募は全国から21点であった。（後で1点は辞退）

また、本年度より審査の方法を手直しをすることとした。まず、ゲスト審査員を毎回新たに加え、審査の巾を持たせ、併せて新味を加えることとしたこと、更に、自薦、他薦の応募作品だけではなく審査員会の推薦作品も審査対象に加えることで更にAACA賞の質を高めることにした。

本年度のゲスト審査委員こは、写真家の村井修氏にお願いした。

第1次審査会は10月14日に開催し提出された応募作品を慎重に審査し、候補作品を3点に絞り、現地審査に付することとした。現地審査は審査委員が複数で当り10月25日、11月8日、11月19日に行い11月20日最終審査会で「モエレ沼公園」に本年度AACA賞を「豊橋東口駅前広場」に本年度AACA特別賞を贈ることに決定した。

AACA賞　モエレ沼公園

審査員：澄川　喜一

183haのモエレ沼はゴミ集積による埋め立てと同時に公園整備として彫刻家イサム・ノグチ氏のマスタープランによる工事が進められ6割余が完成、今年7月オープンした。

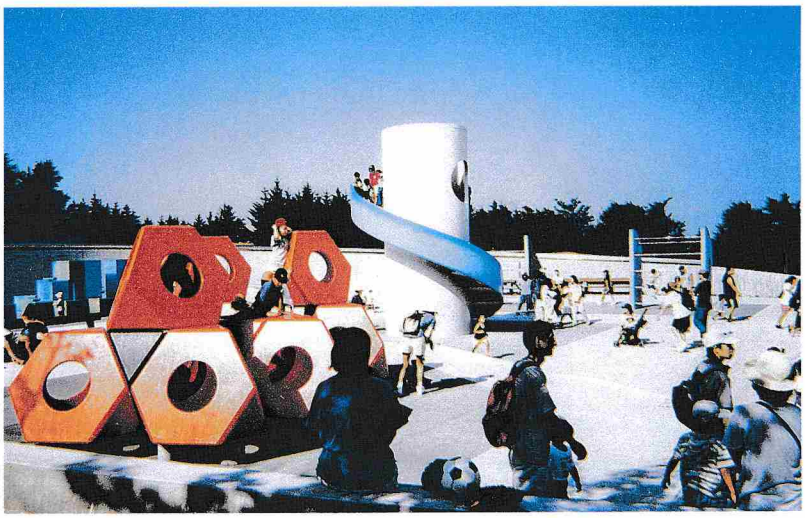
遊具エリア・水深30cmの徒歩池・雄大な稜線を持つプレイマウンテン、それに連なるテトラマウンドは、三本のステンレス円柱を空中で結合させ、三角錐の強い緊張感を創出、内懐にふくらみのある土盛りの円形を包括し、鋭い直線と曲面を交響させており見事である。フレイマウンテンの広がりのある階段状の石積みの三角形と、のびやかな稜線への共鳴感は特に美しい。

ミュージックシェルや諸施設は総て自然と造形物が共生するよう配慮され、優れた環境となっている。自然と人間の関係が密になる、大地に刻まれた大きな彫刻である。

素晴らしい計画が一日も早く完結されることを期待したい。AACA賞に最適の造形である。

AACA賞

対象件名：モエレ沼公園
受 賞 者：設計　札幌市
アーキテクト・ファイブ
監修　イサム・ノグチ



AACA特別賞　豊橋東口駅前広場

審査員：栄久庵憲司

「センスとコラボレーションの勝利」

JRのターミナルビル中心の駅前開発は無個性化に成功した好例である。成功の要因をあげて見よう。

●市民が一体化を強くのぞんでいた背景のパワー。

●市当局、鉄道各社の利害が一致し、広く基本案を内外に募集したこと。

●市が中心となり、鉄道、第三セクターの協調が得られたこと。

●基本案が優れ、それに進行が沿ったこと。

●総合計画に必要な多岐にわたった分野の再編成再統合に成功したこと。

●プロデューサーシステムを活用し、それぞれの持分の性格を保持しながら、その総合があらたな性格を生んだこと。

●関係各社、基本計画会社、照明会社、彫刻会社、サイン会社、ストリートファニチュア会社、ランドスケープ会社等々をつなげ、ちぐはぐを防ぎ深みのある結果を生み出したこと。コラボレーションの成功。

●運輸、土木の諸関係のコラボレーションに成功し、人工地盤の成立、都市運輸の解決に功を奏したこと。

●複雑な人の流れをスムーズにし、新しい駅前をデザインすることが出来たこと。

●一日の変化、四季の変化の反映のある広場となり、行き交う人々が美しく、かつファッショナブルになったこと。

●規制等行政上の難問解決に努力し、これによる地方自治体の訪問が多いことは影響力のいかに大きいかを示している。

AACA特別賞

対象件名：豊橋東口駅前広場

作 者 名：日本技術開発＋デザイングループ

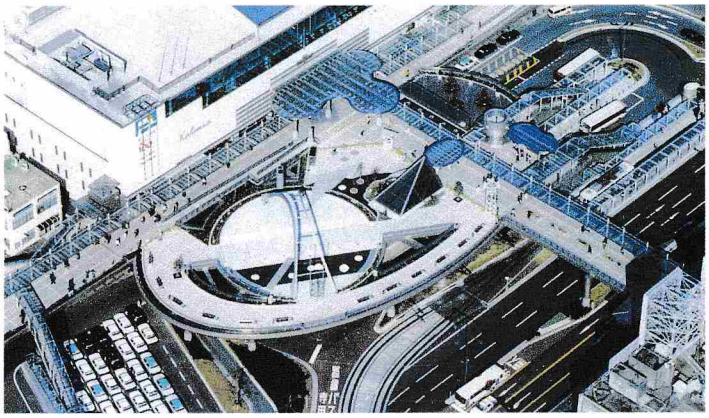
デザイングループ：都市・建築計画研究所

フェイズアソシエイツ

ライティングプランナーズアソシエーツ

アートフロントギャラリー

デザイン監　　修：宇野　求・面出　薫・北川フラム



ゲスト審査員として

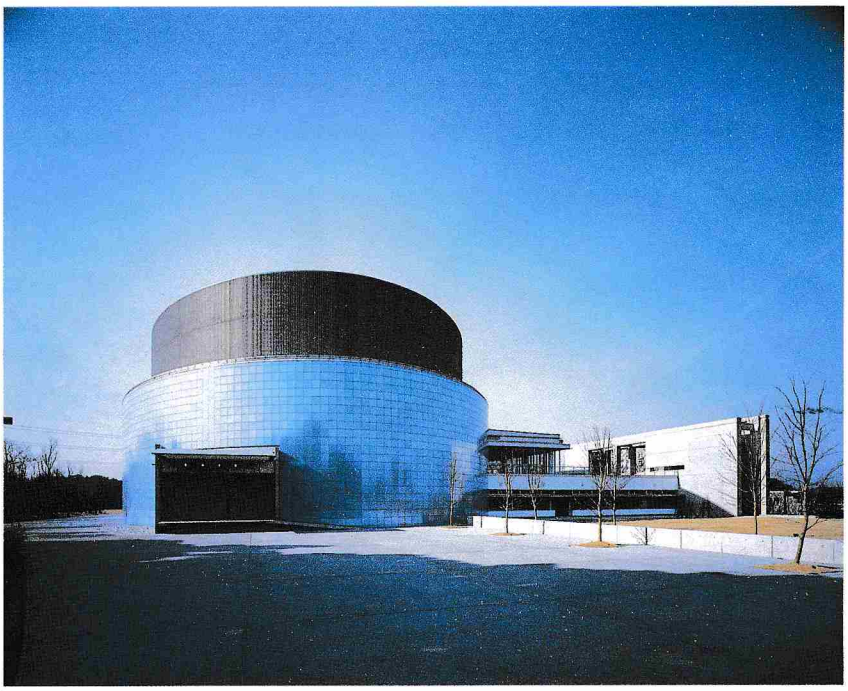
ゲスト審査員：村井　修

この賞の選考委員へお誘いを受けた時、その重責に不安を抱きましたが、40年余カメラを通して建築や美術の現場に立ち会った体験が、少しはお役に立つのかもと僭越ながらお引受けしました。

選考に際して、環境をつくる装置としての建築、美術、工芸、それぞれの作品が対等な立場で共存して、新しい空間の創造を促すという本協会の主旨を大切にしました。

応募全体を通して、個の作品として優れてはいるが、協調という面では少々もの足りなさを感じましたが、その中にあって「モエレ沼公園」は世界に誇りうる作品であり、協会賞に全く適合したものだと思いましたし、また、その自然環境に対して、都市環境への提案として「豊橋東口駅前広場」が特別賞として相応しく思いました。

空を映す



季節を映す

600×600×13m/m大型陶板ラスター

――かずさアカデミアホール――

設計／坂倉建築研究所

施工／竹中・三井・錢高特定建設工事共同企業体

大型陶板

大塚オーミ陶業

●OTセラミック　●テラコッタ　●美術陶板

東京｜〒101-0048 東京都千代田区神田司町2-6 TEL03(5295)3555 FAX03(5295)3556 大阪｜〒540-0021 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL06(6943)6695 FAX06(6943)6487